

命の証

JUDE STACEY 著

ストーリー
JUDE STACEY

イラスト
BORG SINABAN

編集
CHLOE FRABONI

デザイン&アートディレクション
COREY PETERSCHMIDT

クリエイティブ・コンサルタント
**JEFF CHAMBERLAIN, MIRANDA MOYER, NESSKAIN, DION ROGERS,
JOSHI ZHANG**

プロダクション
BRIANNE MESSINA, CARLOS GARCIA RENTA, TAKAYUKI SHIMBO

スペシャル・サンクス
VALERIE STONE

翻訳
GEORGE INAGAKI



Blizzard.com

© 2025 Blizzard Entertainment, Inc. BlizzardおよびBlizzard Entertainmentのロゴは、米国およびその他の国におけるBlizzard Entertainment, Inc.の商標または登録商標です。

Published by Blizzard Entertainment.

このストーリーはフィクションです。本作品に登場する名前、キャラクター、場所、出来事は、著者または作画者の想像による産物または架空のものです。実在する人物（存命中または故人）、出来事、団体、場所に類似するいかなる描写も、風刺的な意図はなく、偶然によるものです。

Blizzard Entertainmentは著者や第三者のウェブサイトもしくはそのコンテンツを管理しておらず、またそれらについて一切の責任を負いません。

命の証

ウォッチポイント・ジブラルタルの通路を満たす空気は冷たかった。無機質な静寂の中で低い機械音が響く。その空間はジュノにとってどこか懐かしく、かすかな安らぎをもたらしたが、それでも故郷とは似て非なるものだった。

数ヶ月前にこの地に降り立ったばかりのジュノ・テオ・ミンにとって、地球は美しくも容易ならざる星だった。もちろん、支えてくれる「家族」がいたとはいえ、火星での生活が楽だったわけではない。「レッド・プロミス計画」によるテラフォーミングは火星に激しい砂嵐を引き起こし、コロニーの安全は脅かされ、最終的にジュノだけが家族の作った宇宙船で地球に向かうこととなった。それでも、火星での生活には平穏があった。全員で同じスーツに袖を通し、同じものを食べ、2つの月の下——同じ場所を家と呼んで眠ったのだ。

ジュノは、火星を去ることは何よりつらい試練だと思っていた。しかし、たった一人、地球で生きていくことはそれよりも難しかった。旅立ちの時に「幸せに生きて」と母は言ったが、大切な家族が危険に晒されているというのに、どうして自分一人が幸せでいられるだろう？ だから、救わなければならない。火星のコロニーを……大切な故郷を。そうでなければ——

と、考え事をしているうちにコマンド・センターの近くに来ていた。

「ジュノ、あなたですか？」

通路の先からメイの声がした。ジュノはハッと背筋を伸ばし、落ち込んでいると思われぬように歩幅を広げる。

「うん！ 今そっちに行くね！」

部屋に着いてみると、そこにいたのはメイだけではなく、階段の上でキャスディが手すりにもたれかかり、その隣にはファラがいた。地図を前にしたウィンストンの肩越しに、エコーが浮かびながらどこかの地点を指し示している。さらに会議用テーブルの前に並んで座り、ホロパッドに表示されたデータをスクロールしているのはエフィとソジョーンだ。ヌルセクターが撤退して以来、基地は以前よりも活気があるように感じられた。オーバーウォッチは危機を乗り越えたのだ——彼らヒーローも世界も、いつまでも傷ついたままではない。

ジュノを見てウィンストンが笑顔を浮かべた。メガネの位置を手で直し、部屋を横切って彼女を迎える。

「やあ、ジュノ！ 調子はどうですか？」

この数日間、ウィンストンとジュノはこの後に控える旅の話をよくしていた。ウィンストンはその支度を手伝いたがり、ルーチェン・インターステラーについての情報を自身の経験を交えて語った。ジュノが不安にならないよう、旅に希望を持てるように、とにかく前向きに支えようとした。しかし、彼とルーチェンの関係は本人が言うほど単純ではないと察せられる程度には、ジュノもホライゾン・ルナ・コロニーの件を把握している。今もまた、彼女に向けられるその笑みは、意図して作られたものに違いなかった。

「もちろん、元気だよ！ でも……」

ちらりとメイに視線をやるジュノ。

「緊張してる。向こうの人たちのこと、私全然知らないし。助けてくれなかったらどうしよう？」

「地球で火星のコロニーのことを一番よく知ってるのはルーチェンです。でも、ジュノにはかないません。だから、向こうもきっとこっちの情報に興味津々ですよ」

メイの発言には筋が通っていた。ルーチェン・インターステラーとの短いやり取りの中で、彼らは技術研究への継続的な取り組みを理由に、協力的な姿勢を示してきた。双方とも、情報交換によって大きな利益を得られる立場には違いない。ジュノが知りたいのは、家族が資源のない状態で取り残されることになった原因と思われる通信障害について。その答えを持っているであろう地球上数少ない人物の一人が、ルーチェンの会長にしてCEOであるチャオ博士だ。その事実が重圧となってジュノの心にのしかかり、この旅に大きな不安を抱かせているのかもしれない。

ジュノが知りたいのは、家族が資源のない状態で取り残されることになった原因と思われる通信障害について。その答えを持っているであろう地球上数少ない人物の一人が、ルーチェンの会長にしてCEOであるチャオ博士だ。

ウィンストンが頷いてメイに同意する。

「虎穴に入らずんば虎児を得ずと言います。それに、私たちがついていますよ、ジュノ。どんな時でもね」

ジュノがウィンストンを、そしてメイを見る。二人とも自信に満ちた顔つきで、それが彼女を安心させた。部屋の向こうでは、キャスディが帽子を軽く持ち上げ、ソジョーンは静かに頷いて意思を伝えてくる。待ち受けるルーチェンとの会合が気がかりには違いないが、それでもここの皆はジュノを信じてくれているのだ。

「うん……そうだね。火星からはるばる地球まで来たんだもん。ここからレイコウに行くくらい、そのついでみたいなものだよね」

ウィンストンが白い歯を見せて笑う。

「そうそう、その意気です！ それでエコー、飛行経路の策定は済みませんか？」

ウィンストンがエコーとの作業を再開すると、他の面々もまた各々の目的に意識を戻し、部屋は明るい活気に包まれた。ジュノはその光景を見守りながら、緊張で高鳴る鼓動を抑えようとしているのか、胸の前で両手を組む。

メイがジュノの肩をぽんと叩き、軽くハグをして言葉をかけた。

「きっとうまくいきますよ」

ジュノは何も言わなかったが、その表情には感謝の気持ちが表れていた。

「出立の準備ができれば声をかけてくださいね」

ジュノがその言葉をかけられるのは二度目だったが、前とは違うと思った。コロニーを離れる時、ジュノにとっての道しるべは母の言葉以外になく、希望という名の重荷をすべて独りで背負っていた。しかし今、彼女の隣にはオーバーウォッチがいる。故郷を救うという使命を分かち合える仲間がついていてくれるのだ。

ルーチェン・インターステラー社敷地内の庭園には、ジュノが今まで見たことのない緑の彩りが広がっていた。

火星の大地から父の好きな西部劇の夕焼けまで、赤やオレンジに囲まれて育ってきたジュノにとって、緑は馴染みのない特別な色だ。イチョウ、ポトス、ジャスミンなど、庭園に植えられたさまざまな植物が、高層ビル立ち並ぶ街の景色を彩る。それはまるで、ヌルセクターによる襲撃の爪痕を自然の美しさで打ち消そうとしているかのようにも思えた。

ジュノたちを出迎えたのは、レッド・プロミス計画の主任科学者を務めるシン博士という女性だった。その歓迎の言葉と柔和な物腰に、ジュノは不安が和らぐ思いがした。

「いかがですか、当社自慢の庭園は？　ヌルセクターの襲撃があったせいでタワーは修繕工事中でして、本日の会合は敷地内の別のオフィスで行います。もしよろしければ、こちらを通して向かいましょう」

「あ、はい、よろこんで！　ここのお庭、すごきれい……」

「ありがとうございます。最先端の水耕栽培システムと気温制御システムのおかげですね。どちらも元々はルナ・コロニーのために開発されたものなんですよ」

シン博士の流暢な説明はまるでツアーガイドのようだ。

道中、メイとシン博士が互いの研究分野を紹介しあい、どちらも気候にまつわる研究をしているということで、専門的な話を始めた。一方、ジュノは二人の頭上を漂いながら、ハンカチノキに咲いた布のような花をしげしげと観察する。そして空中でぐるりと方向転換し、マーシャン・オーバーブーツで高く舞い上がると、通路を離れた。この高さからだと、ヌルセクターの襲撃を受けたタワーがよく見渡せる。窓の一つは内側から吹き飛ばされ、鋭く割れたガラスが窓枠に残っていた。外壁には弾痕や爆発によるスス汚れが見える。ホバリング・プラットフォームに乗った作業員たちが、おそらくは60階付近の高さまで上がり、ねじれた鋼材を慎重に下ろしていく。地上で切り出されている巨大なガラス板のようなものはドウロビドロだろうか。一通り観察してメイとシン博士の元に静かに降り立つと、二人はまだ会話を続けていた。

「——ただ、予想以上に時間がかかってしまっているんです。現在、襲撃を受けたレイコウの復興に社内のほとんどのリソースが割かれていまして」

「素晴らしいことだと思います。世の中、地域への貢献を第一に考える企業

ばかりじゃありませんから」

「私の経験から申し上げれば、ルーチェンはたしかに他の企業とは違いますね。それに、街の復興を進めることは全体の利益にもなりますから。自由な発想を可能とする安全な環境を築き、維持することは、当社の事業だけではなく、地域社会を健全に保つためにも不可欠だと考えています」

その物言いにジュノは違和感を覚えた。メイと研究の話をしていた時とは違い、事前に用意していたかのような発言。どこかぎこちないその言葉の裏に、本人も口に出すのを怖れる何かが隠されているような気がした。

しかし、どうかしたのかと問う前に、シン博士は目の前の扉に備え付けられたカードリーダーに目を向けた。建物の中へと案内されて通路を進むと、ほどなくして会議室に到着する。静まり返ったその部屋でジュノとメイを待っていたのは、居並ぶ研究者たちと――テーブルの短辺でホバーチェアに座る女性、ルーチェンの代表たるチャオ博士だ。

シン博士が彼らを簡単に紹介していく。それぞれレッド・プロミス計画に参加する各分野の専門家とのことだが、この会合の口火を切ったのはチャオ博士だった。

「ジュノ・テオ・ミン……どうぞ、座りなさい。ようやく会えたわね」

「はじめまして、チャオ博士！ お会いできて光栄です！」

精一杯の笑顔で挨拶するジュノ。メイが研究者たちと握手を交わしている間、落ち着きなく部屋の中を見回しながら、ここへ来るまでに考えておいた質問を口にしたくてはやる気持ちをなんとか抑える。

会合は、ジュノがどのようにして地球へとやってきたのかを詳しく説明することから始まった。これほど注目されながら話すのはおかしな気分だったが、研究者たちは皆礼儀正しく、限られた資源でよくそそこまでの宇宙船を作ったものだと感じているようだった。

しかし、話が火星のコロニーの説明に移ると、彼らの興味の対象が明らかになった。それまでとは打って変わり、より具体的な質問が投げかけられる。まるでルーチェンは砂嵐についてすでに多くを把握しているかのように。

火星を発つ前に観測した最後の砂嵐の規模を聞かれ、ジュノが答える。

「今現在、現地で起きているのとどの程度の違いがあるかはわかりませんが、向こうでの最新の観測データを持ってきました。メイおば…メイ＝リン・チョウ博士にも分析を手伝ってもらってます」

一同の視線が集まる中、メイがデータパッドに指を滑らせる。

「はい。その分析からわかったのは——地球の嵐を予測するのと同じようにはいかないということです。ただ、手元のシミュレーションにジュノのデータを入れてみたところ、ある程度の近似性が確認できました。その結果、本日の嵐の発生確率を算出できたことに加え、その深刻さを軽減するために役立つと思われる手段をいくつか考案してきました」

メイが大型のホロ・ディスプレイにグラフを映し出すと、部屋は静まり返った。研究者たちは肩を寄せ合い、手元のデータパッドを指しながらひそひそと声を交わす。シン博士以外、誰もメイの情報に注意を向けようとしていない。遠路はるばるここまで来たのに、一生懸命調べた成果が相手にもされないなんて——控えめに言っても腹が立つ、とジュノが口を開きかけたその時、シン博士が割って入った。

「ジュノ、質問に答えてくれてありがとう。思い出すのもつらかったでしょうに」

「思い出すことくらい……つらくなんてないです。もちろん、故郷や家族が今どんな大変な目に遭ってるか想像するとつらいけど、でも希望を失ったらダメだから。それに、ルーチェンの皆さんが助けてくれるなら百人力です!」

「ジュノの前向きなところは一番の長所ですね」

そう言ってメイが優しい笑みを浮かべると、チャオ博士もまた目を細めた。しかし、その老女の表情はどこか感情が欠けて見えた。

「ええ、そうでしょうとも。ただ、可愛いのはいいのだけれど、一つ覚えておいてほしいの。科学にその身を捧げる組織として——ルーチェンは現実的な道を選ぶ必要があると」

再びジュノの心に不安が押し寄せるが、言葉は出てこなかった。

「最後に受けた砂嵐に関する報告は、コロニーの置かれた深刻な状況を物語っていたわ。そして通信が途絶えた時、こちらで予想できた可能性は一つだった。それに、地球は地球で安全とは言えなくてね。ルーチェンはもう、火星に手を出す余裕がなくなったの」

ジュノは足元が消えたような感覚に陥った。重苦しい沈黙が場を支配する。「それって……みんなを助けてくれないということですか?」

再びの気まずい沈黙。耐えかねたかのようにシン博士が一つ咳払いをして、心底申し訳なさそうに口を挟んだ。

「本当に心苦しいのですが……その、会社としてリソースの配分を考えると、現時点では——」

「もちろん、心が痛むわ、ジュノ。でも、砂嵐の規模は予測を超えるペースで大きくなっているの。あなたが地球に帰ってくる前も、その後も、コロニーと連絡を取ろうとはしている。だけど応答がないのよ。今はもう観測データも得られていない。言いにくいけれど、彼らの生存を示す証は存在しないわ」

——生存を示す証は、存在しない？

何人かの研究者たちが落ち着きなく顔を見合わせる。シン博士がチャオ博士に何かを耳打ちするが、すげなく手を払われていた。そんな周りの様子をジュノは気にも留めない。最後の一言に完全に意識を奪われていたからだ。

「生存の証はないって、どういうことですか？ 私、私がいるじゃないですか。チャオ博士、私が。みんな今も一生懸命頑張ってるんです。火星の大気をなんとか安定させようって、でも資源がないから困って。メイおばさんだってたくさん考えてくれて、さっきそれを見せたのに。こうすればうまくいくかも、みんなを助けられるかもって——」

視界がみるみるにじんできく。それでもジュノは息を吐き、込み上げる涙を押し留める。高ぶる感情を落ち着かせるのは大変で、いつの間にか椅子からわずかに体が浮き上がり、再び口を開いた時には喉のこわばりが声に表れていた。

「みんなは、私の家族は、ルーチェンに約束しました。火星に人が住めることを証明するって約束しました。ルーチェンに頼まれたことも、それ以上のことも、全力で頑張りました。それなのに、たった数ヶ月連絡が取れないだけで……みんなを見捨てるんですか？」

メイがジュノの腕にそっと手を置き、浮き上がろうとする体を座らせる。

若干の間を置いて、チャオ博士が息を吐いた。そして浮かべたその微笑みを、ジュノはもう完全に信用できなかった。

「我が社の決定に賛同してもらえとは思っていないわ。あなたが今日話してくれたことをもっと早く知っていれば、こちらも別の選択をしていたでしょうね」

そう言って、ホバーチェアのアームに手を滑らせるチャオ博士。停止状態にあったチェアが低い音を立てて起動する。

「あなたがこうして無事に地球に帰れたことが奇跡なのよ、ジュノ。けれど、奇跡を信じて会社を動かすわけにはいかない。シミュレーションによると、救出に成功する確率は3%未満。もちろん、あなたが火星から持ち帰ったデータを共有してくれるなら、チョウ博士の研究を支援することに異論はないわ。

「みんなは、私の家族は、ルーチェンに約束しました。火星に人が住めることを証明するって約束しました。ルーチェンに頼まれたことも、それ以上のことも、全力で頑張りました。それなのに、たった数ヶ月連絡が取れないだけで……みんなを見捨てるんですか？」

博士の知識はルーチェンの業務全般に応用できるでしょうね。でも、こんな低い確率に望みをかけて救助隊を送るような無謀な真似はできないの」

ジュノは何も言わなかった。研究者たちが会合のメモをまとめ、ジュノの人生をファイルに収めていくのを黙って見つめる。するとシン博士が彼らに先に退出するよう促し、データパッドを胸に抱えてチャオ博士の隣に並んだ。

部屋に4人だけが残されてようやく、ジュノが口を開く。

「帰ってきたんじゃない」

チャオ博士が眉をひそめた。

「なんですって？」

「私は地球に帰ってきたわけじゃない」

立ち上がって胸を張るジュノ。

「故郷を置いてここに来たの」

視界の端に、メイが同情と悲哀の入り交じった顔をするのが見えた。しかしそれはどこか誇らしげでもあった。

「……ええ、そうだったわね。ただ、どんな形にせよ、今後もちろと協力していくつもりがあるのなら、レッド・プロミス計画の件は他言無用よ。あなたの地球への“来訪”が大きく報道されたことも、今回の件を複雑にした原因の一つなの。まあ、これまでの慎重な対応には感謝しているわ」

チャオ博士はそこで言葉を切り、氷のような視線をジュノに向けた。

「この計画が機密扱いだったことには理由があるの。万が一、現状手に入るデータの分析をすべて終える前に計画の全容が漏れてしまえば、あなたと手を取り合おうとしても簡単にはいかなくなってしまうでしょうね」

会合の流れを考えれば、口止めしてくることくらい予想できたはずだ。それでも、ジュノは彼女の言葉に失望を禁じ得なかった。

「それさえ守れば、あなたとチョウ博士の気象データに目を通すのもやぶ

さかではないわ。よく考えなさい、ジュノ。ご両親は、人類の地球外移住を実現するために力を尽くした。娘であるあなたにも、その夢に協力してほしいと願っているはずよ」

ジュノはテーブルに視線を落としたまま返事をしない。家族を代弁しようとするその傲慢、その浅はかさに意識を向けたくもなかったからだ。

チャオ博士はシン博士の横を通り過ぎ、ドアへと向かいながら付け加えた。「また連絡をするわ。シン、お見送りを」

そうしてルーチェンを率いる老女史は去り、ジュノは胸に抱えていた問いを向ける相手を失った。

「その、よければ記念館を見学していきませんか？ 庭園のすぐ先にあるんです。どうぞこちらへ」

メイがシン博士に頷いて、ジュノの手をそっと握る。ジュノは手を引かれるがまま来た道に戻るしかなかった。夕暮れの庭園は行きとはまるで様子が違って見えた。今になって初めて、緑の中にある機械の鈍い銀色に気づく。池のそばに残された、何かの動物が掘った穴と泥の足跡。メンテナンス用の通路のひび割れからは雑草が生え、水耕栽培システムの機械音はナイト・マーケットの喧噪をかき消すほどに大きい。ずらりと並んだ照明の光が、宵の空に浮かぶ星々を塗りつぶしていた。

記念館に着くと、後ほどギフトショップで落ち合う約束をして、シン博士はガイドに二人の案内を任せた。つい数時間前までなら目を輝かせて見学ツアーを楽しんでいたであろうジュノも、今はほとんど興味を示さない。多数の衛星画像、スター・コンパニオン計画の動物の写真、いくつかのロケットの設計図、ホライゾン・ルナ・コロニーの説明図など、どんな展示を目にしても、もやがかかったように曖昧な意識の外に消えていく。ギフトショップに着く頃には、ジュノはただジブラルタルに早く帰りたいと願うだけだった。

シン博士は店の入口の前に立っていた。中で買ったのだろう、大きなロケットの模型を両手で抱えている。合流するや否や、彼女はジュノに向かって、このロケットにはホライゾン・ルナ・コロニーのロゴが描かれていて、そこを押すと星々のホログラムが投影されるのだと熱心に語った。底にはメンテナンス用の操作盤まであって、映し出すホログラムを自分で変えられるのだという。

たしかによく出来た玩具だし、ジュノへの配慮が見て取れる。しかし、所詮は玩具だ。ルーチェンの下した決定がジュノにとってどれほど重かるうが、まともに取り合おうともせず、上から見下す子供扱い——チャオ博士の非情な対

応を受けたジュノの目には、もはやそうとしか映らなかった。

「ありがとうございます」

ロケットを手渡してくるシン博士にジュノはそう言った。その時どんな気持ちだったとしても、プレゼントをもらったらお礼を言いなさい——それが家族の教えだからだ。

「いえいえ。なにしろ、その……今日はこんなことになってしまいましたから。せめて何か持って帰ってほしかったんです」

ジュノが顔を上げると、シン博士の背後に出入り口が見えた。途端、この偽りの城から走って逃げ出したい気持ちが沸き上がる。

「それに、これがあれば故郷を思い出せるかと思ひまして」

その言葉にジュノはハッとした。それは、ここに来てから初めて聞いた、故郷を想う彼女への思いやりの言葉だった。

シン博士が声をひそめ、ためらいがちに続ける。

「ジュノ、ごめんなさい。今更こんなことを言っても仕方ありませんけど、私は救出計画を中止するべきではないと言ったんです。結局却下されてしまいました……」

ジュノがシン博士の目を見る。すると、急に印象が違って見えた。これまでこの研究者の一人としか思っていなかった彼女もまた、ルーチェンの決定に涙を飲んだ人間なのだ。同じレッド・プロミス計画のメンバーなのだから、仲間を見捨てる判断に傷つかないはずがないではないか。

「ありがとう、シン博士」

ジュノはもう一度お礼を言った。先ほどとは違い、心を込めて。

メイがジュノの肩にぼんと手を置き、出口に体を向けた。

「シン博士、今日は本当にありがとうございました」

そしてジュノに頷き、一言付け加える。

「私たち、諦めませんから」

別れを惜しむかのように、シン博士は二人を出口まで見送った。そしてドアが閉まりかけた時、不意に駆け出して二人を呼び止める。

「チョウ博士！ 待ってください！」

必死な様子で肩をつかんでくるシン博士にメイは驚き、彼女とジュノへと交互に視線をやる。

「お二人とも、どうかお気をつけください」

発せられたのは警告の言葉。シン博士は背後のタワーを不安そうに振り返

「ルーチェン・インターステラーという会社は.....きっとお二人がチャオ博士に抱いていらっしゃる印象と同じように、甘い組織ではありません。何より優先されるのは計画の進行.....たとえ犠牲を伴ったとしても」

り、メイから手を離れた。

「ルーチェン・インターステラーという会社は.....きっとお二人がチャオ博士に抱いていらっしゃる印象と同じように、甘い組織ではありません。何より優先されるのは計画の進行.....たとえ犠牲を伴ったとしても」

その夜、ジュノとメイはレイコウのナイト・マーケットを散策していた。ジブラルタルへと戻るドロップシップの準備ができるまでまだ時間があったため、会合の件で落ち込むジュノを励ますべく、メイが連れ出したのだ。

店を巡ってジブラルタルの皆への土産を物色する間、メイの心遣いをありがたく思いながらも、ジュノの思考は一つの言葉にとらわれていた。

「彼らの生存を示す証は存在しない」

——それはチャオ博士の告げた冷徹な所見。

ジュノの頼りない足取り、あるいは人混みを避けようとして肩を丸める様子から察したのだろう、メイが少し休んでいこうと提案し、二人はマーケットの外れにある小さな料理店に入った。気の置けない仲間と食卓を囲めば、いくらかは気が晴れるものだ。温かい中華料理を頼張るうちに、ジュノは心がほどけていくのを感じた。そうして二人は、ナイト・マーケットを行き交う人々を眺めながら、互いに言葉もなく心地良い時間を過ごす。やがて夜も更け、他の店が閉まり始めた頃、メイが口を開いた。

「ジュノは.....すごいですね」

「え？ どうして？ どこが？」

心底不思議そうにジュノが聞き返す。今日の一件があってからというもの、彼女はすっかり自信を失っていた。

「家族のためにあのチャオ博士に言い返すなんて、並の度胸じゃできませんよ」

ジュノはよくわからないといった顔で通行人たちに視線を戻す。

「私だったら、同じことができたかどうか。とても勇気のいることです」

「できるに決まってるよ」

メイは何も言わず、ただ微笑んで首を振るだけだ。しばしの沈黙の後、再びジュノがメイを見る。

「メイおばさんも……怖かった？ エコポイント・アンタークティカからオーバーウォッチに戻った時、周りの人が助けてくれようとしても、不安になった？」

「なりっぱなしですよ」

メイはくすりと笑い、穏やかな声色で続ける。

「コロニーが今どうなってるのか、考えると不安になりますよね。ルーチェンの対応も期待外れ。だけど、それがわかったことは収穫です。今朝の私たちより今の私たちのほうが前に進んでるんです」

ジュノを真っ直ぐに見つめ、にっこりと微笑むメイ。

「それにほら、まだ救助隊の準備をしてなかったっていうだけで、救助を送れないと決まったわけじゃありません」

「私、わからないよ。どうして人を助けることを説得しないといけないの？」

「……地球には、たとえ正しいことでも、自分たちの利益になるとわかるまでしたがる人たちがいるんです」

ジュノは何も言わず、皿の上に残ったチンゲン菜を箸でつついている。

「ジュノはお母さんにそっくりですね。ジャイーも、私なんかよりずっと勇気があって……怖い物知らずと言ったほうがいいくらいでした。どれだけ大変でも、正しいことをするのが一番大事だと言って譲らなかつたんです。私がオーバーウォッチに入ったのも、元々はジャイーの信念……『私たちの努力が社会を変える』という考えに影響されてのことなんですよ」

その言葉を聞いて、ジュノは安心したかった。しかし、不安はますます大きくなるばかりだった。どうしてメイは——故人を偲ぶかのように母を語るのか。

「メイおばさんとオーバーウォッチの人たちがついていてくれるのはわかるし、嬉しいけど……」

顔を上げたジュノの瞳は涙に濡れていた。

「私、家族のみんなに会いたいよ。みんなのこと……諦めたくないよ」

テーブル越しにそっと手を握るメイ。外の通りでは、ナイト・マーケットを照らしていた灯りが一つ、また一つと消えていく。

「メイおばさんとオーバーウォッチの人たちがついていてくれるのはわかるし、嬉しいけど……」

顔を上げたジュノの瞳は涙に濡れていた。

「私、家族のみんなに会いたいよ。みんなのこと……諦めたくないよ」

「もちろん、諦めたりしませんよ。みんなで必ず助け出しましょう。約束です」

ジブラルタルへの帰路は長く、ドロップシップの乗り心地も快適とは言い難い。そんな道中、ジュノはまだ今回の訪問のことを考えていた。チャオ博士の冷たい拒絶と、シン博士の警告。もはや誰を信じたらいいのかわからない。

やがてジュノがうとうとし始めた時、不意にドロップシップが大きく揺れた。荷物入れから私物がこぼれ落ちる。ジュノは座席の縁をしっかりとつかんで目を閉じ、揺れが収まるのを待った。

少しして、室内のスピーカーからトレーサーの音が響く。

「ごめんごめん、乱気流に突っ込んだじゃった！ この後はもう大丈夫だと思うから安心して」

ほっと息を吐き、目を開けて体の力を抜くジュノ。床に散らばった荷物を片付けていると、端のほうまで転がっていったお土産のロケット模型に目がいった。それは星のホログラムを点滅させながら、硬い金属の床でがたがたと揺られている。

拾い上げてよく観察したところ、大きな傷はついていないようだったが、ちらつくホログラムは明らかに故障だ。

こんなにすぐ壊れるなんて、と驚きながらも、ジュノは鞆から工具セットを取り出し、模型をひっくり返して操作盤のフタのネジを回し始める。すると、最初から緩んでいたかのように簡単にフタが外れた。

中にはデータチップとメモがテープで貼り付けられていた。メモの内容は、模型のケーブルを繋ぎ変えて音声を出力する方法と、データチップのインストール方法。そして最後にこう走り書きされていた

——何かあったら連絡します

希望を捨てないで

「この通信を聞いている人、私たちのことは諦めたってかまわない。だけど.....せめてあの子を、私たちの命の証を、どうか見捨てないで」

—S

その後ずっと、ジュノはドロップシップの中で模型の改造に没頭していた。ジブラルタルに到着すると鞆にしまい、明日の朝改めて報告するからと仲間たちに告げて部屋にこもった。そして明け方頃になってようやくそれは終わった。

スピーカーを繋いだ模型の前に座り、何が再生されてもいいように覚悟を決めてスイッチを押す。星のホログラムが映し出されたかと思うと、映像が突然火星のコロニーに切り替わった。そしてスピーカーから聞こえてきたのは——

「こちらジャイ・テオ。プロジェクト『レッド・プロミス』のもと、火星コロニーに駐在する研究者です。誰かこれを聞いていたら応答してください。物資が足りません。至急、ルーチェン・インターステラーによる支援が必要です」

まぎれもない母の声。聞いただけで涙があふれそうだったが、このメッセージは覚えのあるものだ。数ヶ月前、ジュノが地球に発つ際にコロニーから送信されたものと同じ。だから彼女は落胆の溜め息とともに、スイッチを切ろうとした——その時だった。

「ジュノ、聞いている？ 私たちは無事よ」

若干の間を開けて、今度は父の声が聞こえた。声が遠いせいで何を言っているのかはわからなかったが、確かに父のキエムだ。そして再び母親の声がした。

「あなたは私たち全員の自慢の子よ。何があっても、この宇宙のどこに行っても、絶対にジュノの味方になってくれる人はいる。それに、たとえ隣にいらなくても、あなたが忘れてしまわない限り.....私たち家族は一緒だからね」

すると慈しむような声色が一転、火星を発つ時に聞いた別れの言葉と同じ、決意を込めた真剣な口調に変わる。

「この通信を聞いている人、私たちのことは諦めたってかまわない。だけど.....せめてあの子を、私たちの命の証を、どうか見捨てないで」

息をすることも忘れて聞き入るジュノ。その様子は母の顔が映し出されるの

を待っているかのようにだったが、通信音声はノイズに変わり、ホログラムもかすれて消えた。静寂に包まれる室内でジュノは模型を抱きしめる。そして何度も何度も、母の声から希望を拾い集めるかのように、繰り返し再生するのだった。



著者紹介

Jude Stacey - ライター、ゲーム・デザイナー。文学とライティングに関する知識を生かし、詩集の編集者としてキャリアをスタート。その後、ゲーム業界に携わるようになり、現在「OW2」のシニア・ナラティブ・デザイナーを務めている。趣味は友人とのレスリングとゲーム。ニューイングランド在住。パートナーとペットとともに映画鑑賞を楽しむ日々を送っている。ヒーローに対する愛情は人一倍。